

4～6 歳児の社会情動的スキルとレジリエンスに関する研究 (台湾レポート)

朱子君 & 洪福財¹

(台北教育大学)

I. はじめに

SEL (社会性と情動の学習)とは、CASEL (2021)の定義によると、すべての若者と大人が健全なアイデンティティを育み、感情をコントロールして個人的な目標や共同の目標を達成し、他人に共感し、それを伝え、互いに助け合う関係を確立して維持し、責任と思いやりのある決定を下すための知識、スキル、態度を習得して適用するプロセスを意味する。SEL を組み入れた教育現場の活動を通じて、子どもは心の動きを理解し、他人の感情に配慮し、自分の感情を表現する力を身につけることができ、将来の集団生活においてスムーズな交流を図るための情動知能を高めることができる。レジリエンスとは、精神的なウェルビーイングの土台となり、ストレス、逆境、トラウマなどのネガティブな経験に適応し、回復する能力を意味する。レジリエンスが高い人間は、冷静さと自己制御力を維持しながら、挫折から立ち直り、自分がどれだけの困難に立ち向かえるかの判断もできる。レジリエンスは人格的な成長やその他の発達分野に影響を与え、燃え尽き症候群のリスクを効果的に軽減する。

台湾の幼児教育において、社会情動的スキル (SES) とレジリエンスは比較的新しい概念である。政府の幼児教育カリキュラムには社会的スキルのみが含まれている。過去 10 年間、一部の高等教育機関で幼児教育における社会情動的スキルの重要性が認識されるようになった。しかし、研修に参加する保育者や園長のために社会情動的スキルを導入したワークショップが現れ始めたのは、ここ 5 年ほどのことである。こうしたワークショップの受講者たちは研修後に園に戻り、園の保育者たちの中で指導的な役割を果たし、社会情動的スキルの育成を促進することが望まれる。一方、レジリエンスについては、その概念を適切に説明できる者はわずかであり、台湾の幼児教育業界ではレジリエンスがほとんど知られていないのが現状である。

台湾の子どもは通常、2 歳から 5 歳の間幼稚園に通い、毎日約 8 時間を学ばずに費やす。保育時間が長いのは、主に共働き世帯が多いためである。親たちは子どものホリスティックな発達を促し、人生に対するポジティブな態度を育成するために、幼稚園に通わせることを選ぶ。その結果、幼稚園教育は、親が与える影響とは別に、子どもの人格、世界観、価値観を形成する上で重要な役割を果たしている。

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) は、アジア各国と共同で、幼児教育における社会情動的スキルとレジリエンスの研究を進めている。この研究は、特に新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) によるパンデミックが終結した後で、乳幼児関連

¹ 責任著者

施設で働く保育者が子どもたちについて深く理解する助けとなる重要な研究である。

本プロジェクトでは調査を2回実施した。1つは、幼児教育・保育施設の管理職を対象とした予備調査、もう1つは保育者を対象とした本調査である。以下のセクションでこれらの調査結果を述べる。

II. 予備調査(フォーカスグループインタビュー)と主調査(ケースインタビュー)

●幼児教育・保育施設の管理職／主任保育者を対象としたインタビュー(予備調査)

調査参加者の属性

台湾における「社会情動的スキル」と「レジリエンス」の実践状況を把握するため、管理職4名と主任保育者2名にインタビューを行った。6名の保育者は皆、幼児教育分野における10年以上の経験を有しており、今日の教育政策や動向について理解していた。

幼児教育施設の管理職／主任保育者による「社会情動的スキル」の認識

台湾政府や高等教育の現場はSEL(社会性と情動の学習)を促進しているため、インタビューを受けた管理職と主任保育者の大半がSELについて聞いたことがあり、その意味を知っていた。ただ、彼らは社会情動的スキルをSELと解釈し、操作的定義のない学習面のみを理解しているように見受けられた。管理職たちは公共政策に触れることが多く、新しい動向について知識を得るために熱心に取り組んでいる一方、保育者たちはこの概念についてほとんど知らなかった。

社会情動的スキルの重要性については、インタビューを受けた全員が認識していた。管理職4名のうち3名は、社会情動的スキルの重要かつ影響力のある社会的要因の側面を特定できた。管理職たちはSEL(社会性と情動の学習)についてよく理解しており、SELの重要な要素として以下を挙げている。

- (1) 自己への気づき:感情を理解し、コントロールする能力。
- (2) 自己のコントロール:ポジティブな目標を設定し、達成する能力。
- (3) 他者への気づき:他人に共感し、その共感を表現する能力。
- (4) 対人関係スキル:ポジティブな人間関係を構築し、維持する能力。
- (5) 責任ある意思決定:責任ある意思決定を行う能力。

以上から、管理職の研修ワークショップが功を奏していることが伺われる。

管理職は皆、子どもの本質的な社会情動的スキルとは、感情の認識、思いやり、コミュニケーションであると考えていた。これらは、保育者の指導、園の文化構築、園児の教育において彼らが重視している概念である。

幼児教育・保育施設の管理職／主任保育者による「レジリエンス」の認識

台湾の保育者にとって「レジリエンス」は聞き慣れない言葉である。インタビューを受けた管理職と主任保育者のほとんどが(大学院で学んだ管理職2名を除く)、レジリエンスを定義することができなかった。レジリエンスを組み入れた保育プログラムやカリキュラムを提供している保育園や幼稚園はゼロに等しかった。

1. あなたは「レジリエンス」をどういう意味でとらえていますか

管理職と主任保育者は「レジリエンス」を以下のように解釈していた。

- (1) 「精神的レジリエンス」と「挫折への耐性」の組み合わせ。精神的レジリエンスとは、逆境に直面しても、内省すると同時に前向きかつ注意深く考えるようになる能力。
- (2) 逆境にあっても簡単に諦めない粘り強さ。
- (3) 挫折や逆境から立ち直る力。

2. レジリエンスがある子どもとはどんな子でしょうか

管理職と主任保育者はレジリエンスのある子どもを以下のように捉えている。

- (1) 配慮する能力が高く、楽観的かつ積極的な態度で人や物事に対応する。社会の中で幸福感を感じる傾向がある。
- (2) 挫折に対する耐性が高く、回復能力に優れている。困難に直面しても解決策を見つけ出し、問題の解決に取り組むことができる。
- (3) 積極的に解決策を模索し、ポジティブな姿勢で困難に立ち向かう。

3. 子どもへのレジリエンスの育成は大事なことだと思いますか

インタビューを受けた管理職と主任保育者のほとんどが、子どものレジリエンスを育成することは重要であると答えた。

- (1) 子どもへのレジリエンスを育成することは、思春期や成人期で困難に直面した時に前向きに対処する能力が養われる。障害を乗り越え、ストレスで精神疾患を患うリスクを軽減する助けになる。
- (2) レジリエンスは不可欠なものであり、家族や園などのシステムを通じて体系的に育成する必要がある。

#保育者を対象としたインタビュー(主調査)

調査参加者の属性

2023年12月28日から2024年1月18日にかけて、現職の幼稚園教諭10名にインタビューを行った。10名の保育者のうち6名が公立幼稚園、4名が私立幼稚園で勤務していた。男性の保育者は1名のみで、残り9名は女性の保育者であった。勤務年数に関しては、2名が7年未満、7名が20年以上の

保育経験を有していた。学歴に関しては、3名が大学院で修士以上の学位を取得しており、うち1名は博士号を取得していた。残りの保育者は学部課程を修了していた。また、インタビューを受けた保育者全員が、管理職ではないフルタイムの勤務者だった。彼らは園児との交流に日々を費やしており、保護者とのコミュニケーションも担当していた。

保育者による「社会情動的スキル」の認識

インタビューの結果、社会情動的スキル(SES)の概念に対する現職保育者の理解は一貫していないことが判明した。ほとんどの保育者は大学課程で社会情動的スキルの理論的知識を教わっていないため、漠然とした理解しかなかった。社会情動的スキルについて聞いたことがないと答えた2名の保育者はいずれも他の保育者よりも若く、勤務経験が短かった。一方、比較的長い経験があり、社会情動的スキルについて聞いたことがあると答えた保育者たちは、「社会的スキル」が幼稚園カリキュラムで重視されていることから、過去の学習機会や職場での勤務経験が社会的スキルを意識するきっかけである、としていた。保育者たちは社会的スキルの知識を活用して社会情動的スキルを理解しようとする傾向が見られた。また、調査の結果によると、保育者たちは社会的スキルのレンズを通して社会情動的スキルを解釈するだけでなく、過去に習得した感情マネジメントに関する知識を活用して社会情動的スキルを説明していることが判明した。保育者たちと掘り下げた会話を行ってみると、彼らは社会情動的スキルの操作的定義を正確に述べることはできないが、感情マネジメントと社会的スキルの知識を組み合わせて社会情動的スキルの概念を解明していることがわかった。

従ってこの調査では、保育者たちの回答に基づき、社会情動的スキルの定義を次のようにまとめる:「社会情動的スキル」とは、対人関係を構築するのに優れたスキルであり、他人に共感を示し、自分の感情を認識してコントロールすることができる能力である。

保育者による「レジリエンス」の認識

現職の保育者10名のうち、レジリエンスの概念を本当に理解しているのは半分だけであった。「レジリエンス」という言葉は「柔軟性」の概念と混同されることがよくある。また、レジリエンスがプレッシャーに耐える能力と密接に関連していると考えている保育者もいた。インタビューの結果、保育者たちはストレスへの対処や認識をレジリエンスと大きく関連付け、プレッシャーに対処する個人の特質やスキルに重点を置いていることが判明した。さらに、保育者たちは、ストレスの多い環境や逆境の経験を通じてレジリエンスが発揮されると考えていた。こうした考えはレジリエンスの中核的な本質を効果的に説明しているが、レジリエンスが子どもの個性のみならず環境によっても影響を受けることを明確にしているわけではなかった。さらに、保育者の中には、レジリエンスとはプレッシャーに耐える能力であると述べ、問題解決に取り組む子どものレジリエンスを強調する者もいた。また、レジリエンスの高い子どもは問題を解決するために粘り強くいろいろな方法を試みると述べた保育者もいた。

従ってこの調査では、保育者たちの回答に基づき、レジリエンスの定義を

次のようにまとめる:「レジリエンス」とは、挫折に立ち向かい、積極的に問題を解決しようとする姿勢である。

「社会情動的スキル」や「レジリエンス」の言葉を知っている保育者は、どこでそれを学んだのか

調査の結果、台湾の保育者の間で社会情動的スキルとレジリエンスに対する理解が広まっておらず、台湾の幼児教育においてこれら概念の位置付けが低いことが判明した。社会情動的スキルやレジリエンスについて聞いたことがある保育者の中には、育児雑誌での紹介や職場での園長との話し合いを通じて、これらの教育概念を知ったと答えた者もいる。正式な学校教育や専門家ワークショップで学んだと答えた者は少なかった。

保育者は4～6歳児にとっての「困難」や「逆境」をどのようなことだと考えているか

保育者たちは、4～6歳の子どもが幼稚園で直面する重大な困難や逆境は主に「自己表現」に関係していると答えている。彼らの観察によると、この年齢層の子どもは、自分の意図を他人が十分に理解してくれない時に不安や困難を感じる人が多い。また、コミュニケーションスキルが不足していると、子どもたちの間で感情的な対立が起こりがちになる。保育者とのインタビューの結果、保育者は、子どもたちが成長過程の一環として、他人との交流を通じて自分の感情や意見を明確に表現することを学ぶ必要がある、と考えていることが明らかになった。

保育者たちはさらに、自己表現の難しさに加え、新しいことを学ぶ時にも、子どもはさまざまなレベルの困難に直面して怒りやフラストレーションを感じる人が多いと述べている。また、大人が言い争ったり、責めあったりするなど、日常生活における対人関係の困難さも、子どもの感情に影響を与えると述べた保育者もいる。意志の疎通がまだ十分にできない子どもにとって、こうした状況に対処することが難しいからである。

保育者は4～6歳児にとっての「うまく適応する」「立ち直る」をどのようなことだと考えているか

4～6歳の子どもが困難に直面した場合、様々な態度を見せる。保育者たちの考えでは、気持ちを落ち着かせるために、こだわっていることをあきらめて困難を回避する子どもがいる一方で、逆境に直面しても粘り強く試行錯誤しながら解決策を模索する子どももいる。従って、幼稚園教諭にとって、レジリエンスとはむしろ、積極的に困難に向き合ったり、困難を「跳ね返す」かわりに「うまく適応」したりするなど、適応力の高さを意味する。

保育者が子どものレジリエンスを育むために行っている活動／実践／交流

保育者たちは「レジリエンス」という言葉をよく知らないものの、レジリエンスやストレスへの適応力が子どもにとって重要であることは全員の一致した認識である。現在、台湾の教育制度は子どものレジリエンスを強化するための特別な教材や評価ツールを提供していない。しかし、保育者たちは子どものレジリエンスを育成するため

に、園でさまざまな活動を利用している。保育者の中には、子どもが困難に直面した時に大人が寄り添うことで感情が安定しやすいことが分かったのもので、そういう時は子どもに寄り添うことにしていると答えた者がいた。また、子どもは仲良しの仲間とともに問題解決を試みる方が、より積極的になることが分かった、と述べていた。さらに、子どものレジリエンスを強化するためにはグループ行動モデルを構築することが重要だと強調する者もいた。彼らの観察によると、子どもたちが個別にタスクに取り組む場合、グループ活動の時よりも諦めやすかったり、粘り強さを欠いたりすることが多い。つまり、子どもたちはグループの支えがある方がレジリエンスを発揮しやすいと言える。保育者たちが採用している最も一般的な教育方法は、子どもが感情の変化を体験できるようなシミュレーションシナリオを作成し、挫折に耐えることでレジリエンスを育てよう誘導することであった。

台湾ではレジリエンス研究がまだ黎明期にあり十分に発展していないため、現在のところ活用できる教育資料が存在しない。多くの場合、保育者たちは自身の判断に頼り、日々の出来事に適応することで、子どもがレジリエンスを養う機会を提供している。ただし、多くの保育者は、子どもがその日にレジリエンスを発揮したかどうかに関係なく、子どものポジティブな行動を連絡帳で伝えたり、園でのお迎え時間に保護者に話したりしていると答えていた。また、子どもが家にいる時は、保護者が園での良い行動を褒めたり励ましたりすることを望んでいた。

保育者が選んだシナリオについて、「保育者としてどう関わるか」「それはなぜか」を尋ねる

主調査では、保育者に提示した4つのシナリオから選んでもらい、保育者としてどう関わるか、それはなぜかを答えてもらった。

シナリオ 1) 友だちから仲間外れにされた(仲間に入れてもらえなかった)

一部の保育者は、子どもにとって友達を選ぶことは何も問題ないと考え、友達グループから仲間外れにされた子どもには、別のグループに紹介することで問題に対処していた。ただし、すべての保育者がこの対処法に同意しているわけではない。保育者の中には、思いやりをもって助け合うクラスを作り、クラスメートが何を必要としているかを考えるよう子どもたちに教える、と答える者もいた。

シナリオ 2) 友達と喧嘩した

保育者たちは、4～6歳の子どもは常に自分のことを第一に考えており、それが友達同士の衝突につながると考えていた。対処法は、子どもたちの間で会話をもつよう促し、コミュニケーションスキルを練習させることであった。

シナリオ 3) 親しい周囲の人(大好きな先生や仲良しの友達など)が引っ越していなくなってしまった

保育者たちは、友達が遠くに離れてしまった場合、その子と連絡を取り合って友達関係を続ける方法を子どもたちに教える、と答えていた。また、悲しみを超えて先のことを考えるよう指導することも、喪失感を解消する最善の方法だと考えていた。

シナリオ 4) 家庭内で辛いことがあった(親に叱られた、親同士の喧嘩、家庭内の雰囲気良くないなど)

保育者のほとんどは、子どもは何も悪いことをしていないので、子どもを元気づけ、抱きしめてやり、解決策を見つけるのを手伝い、状況に対処する方法を教える、と答えていた。子どもはまず自分自身を守ることを学び、それから保護者の痛みを和らげることを学ぶ必要がある、と述べていた。

III. 考察

この約7ヵ月に及ぶ調査で、経験豊富な保育者と園長を対象としたフォーカスグループインタビューと、現職の保育者10名を対象としたインタビューを行った。その結果、台湾の幼児教育における社会情動的スキル(SES)とレジリエンスの研究に関し、いくつかの重要な発見があった。そのひとつは、子どもが示す特定の行動がレジリエンスのプロトタイプと見なされること、また、子どもの社会情動的スキルはこのプロトタイプに基づいた適応行動に影響を及ぼすことであった。社会情動的スキルの高い子どもは優れたレジリエンスの発達を示す傾向がある。以下に、調査から得た重要な発見の一部を記述する。

1. 子どもは自分の意見を適切に表現し、コミュニケーションの問題を解決する前に、自分の感情を認識する必要がある

社会情動的スキルの適用は人との関わりの中で生じる。子どもは友達との交流を通じて相手の感情を読み取る練習をする。そうすることで、自分の感情も認識できるようになる。この認識により、コミュニケーションの内容や対処すべき問題を正確に理解できるようになり、スムーズなやりとりが促される。

2. 社会情動的スキルにおいて最も重要な2つのスキルは自分の感情を理解すること、そして行動をコントロールすることである

園長や保育者の回答によると、4~6歳の子どもはスムーズなコミュニケーションを行うための最初のステップとして、まず自分の感情を理解する必要がある。子どもは、怒り、恐怖、幸福などの感情をいったん理解すると、即座に否定的な行動で反応することがなくなり、まず気持ちを落ち着かせてから問題の解決に取り組もうとする。従って保育者は、まず自分の感情を認識することを子どもに教え、ネガティブな感情や行動を見せると周囲に拒絶される場合があることを理解させるべきである。そういうことを理解すれば、友達とのやり取りの中でネガティブな行動をコントロールする方法を学ぶことができる。

3. レジリエンスとは、元の状態に戻るのではなく、たゆまず前へ進むことである

インタビューの結果、保育者たちは、4~6歳の子どもは常に進化していると考えられていることが分かった。子どもは多くのことを新しい刺激として受け止め、絶えず行動パターンを変化させていく。従って、子どものレジリエンスとは、元の状態に戻るのではなく、たゆまず前へ進むことを意味する。大人とは異なり、子どもには十分に形成された「元の状態」が無いいため、戻るべき状態が存在しないからである。この考え

方は、4～6 歳児のレジリエンスを理解するための興味深い洞察を示唆しており、大人のレンズを通して子どもを捉えてはならないことを研究者に気付かせるものである。また、継続的な成長は大人のレジリエンス研究にも適用すべきである。

4. レジリエンスの育成は子どもが通過すべきプロセスであり、大人のサポートと指導を必要とする

保育者の観察によると、子どもは困難に直面すると自己対話を行い、自分自身に語りかけ、自分の考えを調整しようとする。そのような場合、保育者は通常、子どもが自己対話を完結するまで見守り、直接指示するのではなく、自分で解決策を模索するよう促す。従って、子どもに弁証法的な思考の時間を与え、寄り添ってサポートすることで、子どもの「成長を促す思考(growth mindset)」の発達を促し、他人を責めることなく自分で問題に対処する力を育てることができる。

5. 保育者の判断が保育において重要な役割を果たすため、観察を行うことが必要不可欠である

大半の保育者は、子どもの感情表現が必ずしも挫折の経験から直接生じているわけではないと指摘している。子どもの行動は単に注意を引こうとしているだけの場合もある。従って、保育者は、子どもが本当に困難に直面しているのかどうかを判断するために、上手に観察する必要がある。もし子どもの大げさな行動や感情表現がクラスメートや保育者の注意を引くことのみを目的としているならば、保育者は子どもの感情の流れを断ち切るべく介入し、その子どもを落ち着かせ、仲間と適切に交流できるよう手助けする。

6. 保育者は、感情を認識する方法、効果的にコミュニケーションを行う方法、困難を克服する方法を示すことで、子どもの足場がけをしなければならない

園によっては、子どもが感情的になった時に落ち着ける席を設けている場合がある。子どもがその席に座っている間は、クラスメートがその子の邪魔をしたり、挑発したりすることはできない。この方法により、子どもは自分の感情をコントロールすることができるようになり、クラスメートたちは落ち込んでいる仲間に配慮を示すことを学ぶ。保育者自身もまた、このルールに従う必要がある。保育者が感情的になった時その席に座って気持ちを落ち着かせる。保育者がそうすることにより、その席を使うことが恥ずかしい、といったイメージを払拭することができる。

7. 家庭の教育が必要不可欠

レジリエンスの高い行動パターンを形成するには、園で行われた幼児教育・保育を保護者が家庭で補強する必要がある。子どもが感情表現や行動を一貫して理解できるように、家庭の教育は園の教育・保育と連動する必要がある。子どもがレジリエンスの高い行動を示した場合、保護者は励まし続ける。そうすることで、困難に立ち向かい、レジリエンスの高い行動をとる自信をもたせることができる。

IV. 結論

パンデミックによる長期的な隔離政策の後、園に戻った子どもたちは感情のコ

ントロールやコミュニケーション能力の低下を示した。突然の変化に対処しようとする子どものレジリエンスも懸念されている。コロナ禍を経て注目された「社会情動的スキル」と「レジリエンス」の概念は、幼児教育においてさらに深い保育内容を提供し、子どもへの理解を深めることになった。私たちの社会は本質的に双方向的で支え合う社会であり、隔離による制約を経験した後、幼児教育において社会情動的スキルとレジリエンスを促進することは、まさにレジリエンスの表明そのものである。

Reference

CASEL(2021). What is the CASEL framework? *CASEL*. Retrieved from:

<https://casel.org/fundamentals-of-sel/what-is-the-casel-framework/>